

世親と楞伽經との前後論について

舟 橋 尚 哉

一

最近、フラウワルナー博士⁽¹⁾や干潟博士⁽²⁾や梶山博士⁽³⁾などによつて、世親の年代や清弁・安慧の年代が再検討されつつある今日、世親と楞伽經との前後論にも大きな影響を与えるものと思われる。

従来、宇井博士や常盤博士などによつて、楞伽經の成立は世親以後とされてきた。すなわち宇井博士は「仏教經典史」(昭和三二年刊)において、

「楞伽經は一般に大乘起信論の基づく經といわれ、従つて古い經であるが如くに考えられているが、勝鬘經、象縛經、大雲經、央掘利魔羅經などを引用し、世親以前に存したとは考えられないから、恐らく四〇〇年頃のものであらう」

といわれ、また常盤博士は「統支那仏教の研究」において、

「『楞伽經』の骨格は『瑜伽』『顯揚』『仏性』の諸論に散説せらるる五法、三自性、八識、二無我であり、又その中に是等諸論と共通

する五種乗性や二種闡提や三身説を説いてある、……これより推して『楞伽經』の年代も大体世親と護法との間に置いて大過あるまい」とか、「予は敢て『楞伽』を以て世親以後護法以前という」といわれており、これらが定説となつて、楞伽經の成立は四〇〇年頃であり、世親以後とされてきた。

二

さて、山口博士⁽⁴⁾も指摘されているように、世親造といわれる釈軌論(Vyākhyāyukti)に楞伽經の偈頌品の偈文が九偈も引用されている。

- (1) 諸蘊中に我はない。諸蘊は我でない。それらは「愚夫が」分別する如くにはない。それらは「不可言性として」無ではない。
- (2) 愚夫が分別せる如くに、一切のものが有であり、それが見られている如くであるならば、一切が如実に見られていることになるであらう。

- (3) 「また、そういう立場で」一切が無なるよりしては、雜染と

清淨とは無とならう。けれども見られてゐる如くにそれらはあるのではない。またそれらは無でもない。

とあるが、これはまさしく楞伽經偈頌品の 一三五偈、一三六偈、一三七偈に相当している。更に続いて釈軌論には楞伽經偈頌品一五〇偈、一五一偈、一五二偈、一五三偈、一五四偈、一五五偈の六偈が次の如く引用されている。

- (1) 遍計の自性としては、一切法は不生である。依他起に依住して、人間の分別は迷亂せられてゐる。
 - (2) いつ依他起は清淨となるか。分別を離れたとき、所依は転じて真如である。それは分別を棄てて住する。
 - (3) 分別せられたものは諦としてあるのではないから、分別によって分別してはならない。所取能取の相として、それらは迷亂を分別してゐるのである。
 - (4) 外境を見、すなわち分別してゐるときは遍計所執である。分別によつて分別してゐることが、縁より生起した自性である。
 - (5) 外境を見るのは邪である。外境のないときは心は独存 (k. p. 161) である。道理をもつて觀察するときは、所取と能取とは滅せられる。
 - (6) 愚夫が分別する如くには、外としての境はない。習氣によつて擾亂した心が、外として顕現し生起するのである。
- ただここで注意しなければならないことは、釈軌論には種々の經典名があげられているが、楞伽經という名は見あたらない。いま楞伽經偈頌品が引用されているところも、「解深

密經中に『一切法は無自性云々と説いているが、かくの如き等のこれら一切は了義ではない』と出ている」とあり、「そこでこれらの経節の中で、偈のみを掲げよう」といつて、解深密經中に『諸法無自性、諸法無生、諸法不滅、諸法本来寂靜云々』と説き、その直後に「余〔經〕にも」といつて先程の楞伽經の三偈及び六偈が引用されている。ここに余經というのみで、従つて釈軌論中に楞伽經という經名は見あたらないが、兩者を比較すれば楞伽經偈頌品と完全に一致していることが知られよう。

三

しかし楞伽經偈頌品は鈴木大拙博士⁽¹³⁾もいわれるように、後世の附加と考えられ、従つて四四三年に訳出された四卷楞伽には偈頌品は存しない。それ故、釈軌論が楞伽經偈頌品の偈を引用しているからといつて、世親が楞伽經を知つてゐたことにはならない。けれども私は最近、この釈軌論に引用されている楞伽經偈頌品一三五偈、一三六偈、一三七偈の三偈が、楞伽經無常品の偈（三五偈、三六偈、三七偈）であることを見出した (Sk. p. 156)。無常品の偈であれば四卷楞伽にもあるのではないかと思ひ対照しながら探したところ、次のような偈文が見つかった。

陰中無_レ有_レ我 陰非_二即是我_一 不_レ如_二彼妄想_一 亦復非_レ無_レ我

一切悉有性 如_レ凡愚妄想_一 若_レ如_レ彼所見_一 一切応見諦
一切法無性 淨穢悉無_レ有 不_レ実如_レ彼見_一 亦非_レ無_レ所有_一

(大正一六、五〇〇下)

これはまた無常品三五偈、三六偈、三七偈に相当する次の如き七卷楞伽(大乘入楞伽經、実又難陀訳)とも比較的良好一致している。

蘊中無_レ有_一我 非_レ蘊即是我_一 不_レ如_レ彼分別_一 亦復非_レ無有
如_レ愚所_レ分別_一 一切皆有性 若_レ如_レ彼所見_一 皆応見_レ真実_一
一切染淨法 悉皆無_レ体性_一 不_レ如_レ彼所見_一 亦非_レ無_レ所有_一

(大正一六、六一〇上―中)

また十卷楞伽(入楞伽經、菩提留支訳)では、「陰(蘊)」が「五陰」となっているが仏心品第四には次の如く出ている。

五陰中無_レ我 我中無_レ五陰_一 不_レ如_レ彼妄相_一 亦復非_レ是無_一
凡夫妄分別 見_レ諸法実有_一 若_レ如_レ彼所見_一 一切応見_レ真
一切法若無_一 染淨亦應_レ無_一 彼見無_レ如是 亦非_レ無_レ所有_一

(大正一六、五四四上)

四

かくして釈軌論の著者が世親であるという定説が疑われない限り、世親は楞伽經の偈頌を知っていたことになる。もつとも釈軌論では解深密經の名を明瞭に出しながら、楞伽經については「余〔經〕に云く」といつているのみで、經名を

出していないことは、あるいは楞伽經の成立しつつある時期であつたのかもしれない。あるいはこれらの偈文が他の經典にあつて(その經典が現在伝わっておらず)、楞伽經と釈軌論とがたまたま同じ偈文を引用したのかも知れない。しかし釈軌論が解深密經と並列して楞伽經の偈文を引用している状態、及びその偈文が楞伽經偈頌品のみならず、無常品にも出ており、しかも四四三年訳出の四卷楞伽にもこの偈文があることを考え合わせれば、やはり世親は楞伽經を知っていたのではないかと思われる。

ところでここに「余經に云く」とあり、經名を出していないからといって、世親が楞伽經という經名を知らなかつたことにはならないと思う。なぜなら、山口博士も指摘しておられるように「維摩經仏国品の『心が淨ければ仏国土の淨まる』ことが成し遂げられる』という經文が、五世紀の後半から六世紀の中葉まで在世した安慧(Saichō)の中辺分別論釈疏に『或る經の語』として引用せられてゐる」からである。安慧は維摩經なる經名を知つてゐたと思われるのに、經名を出さずに、「余經中にも説けり」といつてゐるのである。

五

楞伽經の成立が世親と接近した時代であることを思わせる資料として、安井博士も指摘されているように、楞伽經無常

品 (Sk. p. 169) に出ている、

「⁽¹⁸⁾知が所縁の境を把握しないとき、そのとき、唯識に住することがある。〔すなわち〕、識の所取が無なるによつて、能取にはまた、〔所取を所縁の境として〕能取するはたつきがない。……云々。ということが世尊によつて説かれていたが……。」

という文は、世親の「唯識三十頌」の第二十八偈、すなわち「⁽¹⁹⁾識が所縁を把握しないとき、唯識に安住する。所取が無いとき、それを能取しないから」

という偈文と極めてよく一致している。それ故、安井博士は「入楞伽經が唯識説を伝統しつつ、しかも世親に年代的に近いことを物語るもののように思われる」と述べておられるが、私はこれらの資料よりして、楞伽經の成立は世親以前で、比較的世親に近い時代と考えたいのである。そして四卷楞伽が四四三年に訳出されているので、当時、インドから中国へ伝来した事情を考え合わせれば、楞伽經は少なくとも四〇〇年頃までには成立していたと考えなくてはならないであろう。

しかし楞伽經は大乘經典の中でも比較的後期に属し、それほど早く成立した經典とは考えられない。なぜなら、常盤博士もいわれているように、楞伽經には八識や五種乗性や二種聞提や三身説が出ており、思想的には如来藏思想の影響を受け、且つ唯識思想としてもかなり発達していると考えられる

からである。また宇井博士も「⁽²⁰⁾仏教經典史」の中で「楞伽經には勝鬘經、象縛經、大雲經、央掘利魔羅經などの引用がある」といわれているように、七卷楞伽やサンスクリットばかりでなく、四卷楞伽（四四三年訳出）にも、遮食肉品第十六に次の如き偈文が見出される。

縛象、与大雲 央掘利魔羅 及此楞伽經 我悉制⁽²¹⁾断肉⁽²²⁾

（大正一六、五一四中）

また十卷楞伽（留支訳）のみにしか見出されないが、「我於⁽²³⁾象腋・央掘魔・涅槃・大雲等一切修多羅中⁽²⁴⁾不⁽²⁵⁾聽⁽²⁶⁾食肉⁽²⁷⁾」（大正一六、五六三下）という記述もある。これらの經典の引用からして、楞伽經の成立はほぼ三五〇年—四〇〇年頃に落着くのではないかと思われる。

六

さて世親の年代であるが、近年、宇井博士の三二〇年—四〇〇年説が定説となつていた。けれども最近干潟博士の四〇〇年—四八〇年説、フラウフルナー博士の「二人の世親説」などがあり、いずれも定説となつていない。しかしグプタ王との関係からいえば、四〇〇年—四八〇年説の方が妥当であると考えられている。ただこの場合、世親の年代は楞伽經成立（四〇〇年頃）以前であるという宇井博士、常盤博士の定説があつたため、世親の年代を四〇〇年以後にもつてくること

には問題があつたようである。けれども楞伽經の成立が世親以前ということになれば、世親の年代を四〇〇年以後としても何等差支えがないと思う。

世親の年代が德慧の年代に接近している。すなわち四〇〇年以後であろうことを傍証するもう一つの資料として、釈軌論の德慧の註疏に次の如き記述がある。

「阿闍梨(acarya)に、まのあたり(pratyakṣa)聞くに信を具し、劣慧の人々を利益しようと欲して釈軌論の註疏(tīkā)が造られた」

ここに德慧は阿闍梨(世親)よりまのあたり、聞いたとあり、山口博士も「德慧はもう少し世親に近いのかも知れない」といつておられるように、宇井博士などの定説である、世親が三二〇年—四〇〇年で、德慧が四二〇年—五〇〇年では、世親と德慧とが少し離れすぎているように思われる。もし干潟説のように、世親が四〇〇年—四八〇年で、德慧が四四〇年—五二〇年であれば、ここに德慧が「世親よりまのあたり、聞いて信を具し云々」といつていることも十分納得できるように思われる。

かくして世親造といわれる釈軌論に楞伽經偈頌品の偈の引用があり、それと同じ偈文が楞伽經無常品にも見出され、それが四四三年訳出の四卷楞伽にも見出されることは、世親が楞伽經を知つていたという有力な資料になると思う。

世親と楞伽經との前後論について(舟橋)

世親の年代が三二〇年—四〇〇年なのか、四〇〇年—四八〇年なのかについて論じられている今日、楞伽經の成立(ここのでいう楞伽經の成立とは、勿論、羅婆那王勸請品(二請仏品)や最後の偈頌品などが附加される以前の原型の成立をいう)が世親以前であるということになれば、世親及び世親周辺の年代も益々明確になるのではないかと思う。

- 1 E. Frauwallner; Landmarks in the history of Indian logic (WZKSQ. V. 1961) pp. 129~131, p. 137.
 - 2 干潟博士「世親年代再考」(宮本正尊教授還暦記念論文集・印度学仏教学論集)三〇五頁以下。
 - 3 梶山博士「清弁・安慧・護法」(密教文化第64・65号)一五九頁参照、「安慧年代再考」(印仏学会、立正大学、昭42年)
 - 4 宇井博士「仏教経典史」一四九頁参照。
 - 5 常盤博士「統支那仏教の研究」七七頁参照。
 - 6 同書一二五頁参照。
 - 7 山口博士「大乘非仏説論に対する世親の論破——釈軌論第四章に対する一解題——」(東方学会創立十五周年記念「東方学論集」三八二頁参照)。
 - 8 影印北京版113巻281—4—6以下参照。
 - 9 德慧の註によつて補なう(山口博士「大乘非仏説論に対する世親の論破——釈軌論第四章に対する一解題——」三八四頁)
 - 10 影印北京版113巻281—4—8以下参照。
- 山口博士「大乘非仏説論に対する世親の論破——釈軌論第四章に対する一解題——」三八二頁—三八三頁参照。

世親と楞伽經との前後論について（舟橋）

11 影印北京版113巻281—4—2参照。

山口博士「大乘非仏説に対する世親の論破——釈軌論第四章に対する一解題——」三八一頁参照。

12 同書三八二頁参照。

影印北京版113巻281—4—4 なお解深密経無自性相品第五には「一切諸法皆無性 無生無滅本來寂 諸法自性恒涅槃 誰有智言無三密意」（大正一六、六九六中）とある。

13 鈴木大拙博士「楞伽經」（鈴木大拙全集第五巻）には「偈頌品、これも後からの追加せられたものである」（四七二頁）とある。

14 山口博士「世親の釈軌論について——かりそめな解題といふほどのもの——」（日本仏教学年報第二十五号）三五頁以下参照。

15 山口博士「浄土について」（仏教学セミナー第十一号）十二頁。

山口博士「世親の浄土論」一六五頁—一六六頁参照。

16 安慧の年代については最近フラウワルナー博士及び梶山博士の五一〇年—五七〇年説（従来四七〇年—五五〇年頃）が承認されつつある。（E. Frauwallner; Landmarks in the history of Indian logic (WZKSÖ. V. 1961) p. 137. 梶山博士「清

弁・安慧・護法」、密教文化第64・65合併号参照）。

17 山口博士「中辺分別論釈疏」四〇五頁参照。

18 安井博士「入楞伽經「無常品」の原典研究」六八頁参照（大

谷大学研究年報第二十集）。

19 南条文雄博士校訂「梵文入楞伽經」一六九頁四行目参照。

20 Yādā tv ālambanam vijñānam naivopalabhate tadā/
sthitam vijñānamātrātrve grāhyābhāve tadagrahāt //28//

(Lévi p. 43. l. 10)

21 安井博士「入楞伽經「無常品」の原典研究」六八頁参照。

22 常盤博士「続支那仏教の研究」七七頁、一二五頁—一二六頁

23 宇井博士「仏教経典史」一四九頁参照。

24 サンスクリットでは「どのような経典にも〔肉食は〕従うべきものとは許されず云々」とあるのみで経典名は出ていない。
（安井博士「入楞伽經における肉食の禁止——梵文「食肉品」和訳・梵文訂正——」大谷学報第四十三巻第二号九頁参照）。
勿論偈文（第十六偈）では、サンスクリットでも象腋・大雲・涅槃・央掘魔の名が見える（同書十二頁参照）。

Sk. p. 258.

hasikakāṣaye mahamegha nirvāṇaṅgulimāle/
lankāvatārasūtre ca mayā māṁsam vivarjitam //16//

25 世親の年代については、以前から四世紀説と五世紀説とがあり、論争されてきた。しかし最近では宇井博士の三二〇年—四〇〇年説が定説となつてゐる。

26 千潟博士「世親年代再考」三一六頁以下参照。

佐々木・井ノ口・高崎・塚本博士「仏教史概説」（インド篇）九三頁参照。

27 影印北京版114巻173—5—4参照。

28 山口博士「世親の釈軌論について——かりそめな解題といふほどのもの——」（日本仏教学会年報第二十五号）

29 千潟博士「世親年代再考」三二一頁参照。